

付篇1

光市東之庄神田遺跡出土の縄文時代石棒

川島 尚宗

1. 収蔵の経緯

現在山口大学埋蔵文化財資料館に所蔵されている本資料は、かつて山口大学が島田川流域で調査をおこなっていた際に収集されたものである(小野1953、田畑2000、福本1966)。『島田川』(小野1953:103)によれば、光市に所在する神田住宅の土師器が多量に出土した地点から東へ数十m離れた桑畑から出土したという。収蔵の経緯については詳しく述べられていないが、本資料は地元の方より寄贈を受けたものと判断される。その後、資料的な稀少性から様々な文献でとり上げられてきたものの、本資料^{註1}について詳細な検討がなされることはなかった。本稿では、本資料の再実測をおこない報告するとともに、周辺地域の類例との比較によって、本資料の系譜および時期について若干の考察を試みる。

2. 出土推定地周辺の環境

上述の通り、本資料の出土地点は明確ではないが、神田住宅の東側で出土したという記述から範囲を絞り込むことができる。本資料にともなう土器などの遺物は一切知られていないが、周辺に分布する縄文時代遺跡について概観し、本資料の出土地について検討する。本資料の出土地点は、東之庄神田遺跡の範囲内にあると考えられる(図117)。東之庄神田遺跡は、古墳時代の土師器・須恵器が大量に採集されているが(福本1966)、縄文土器については報告がない。周辺の縄文時代遺跡としては、東之庄神田遺跡の南側に隣接する横樋遺跡が知られている。当遺跡からは縄文時代後期中葉の土器のほか、各種石器、植物遺存体などが採集されている(福本1966、河村2001)。石冠の可能性のある磨石のほかには祭祀具は出土していないが(山田2008)、横樋遺跡以外に縄文時代を主体とする周辺の遺跡は知られていないため、本資料との関連が予測される遺跡である。

3. 出土遺物と山口県内出土石棒^{註2}

本資料は、全長67.7cm、最大幅4.1cm、最大厚3.4cm、重量1,595gをはかる大型品である(図118-1・写真269・表25)。断面形態はほぼ楕円形を呈し、長軸方向に平坦部を一面有する。文様および把頭は有さない。石材は頁岩と考えられる。一端はやや薄くなり刃状を呈し、他方は断面が真円に近くなり端部が平坦となる。石棒全体に研磨の跡がみられ、丁寧な調整が施されている。両端に敲打痕が認められる。刃部は明瞭ではないため、後藤分類(1986)のI類に分類されると考えられる。本資



図117 東之庄神田遺跡周辺遺跡分布図
(山口県教育委員会(2002)および国土地理院発行
基盤地図情報数値標高モデルより作成)

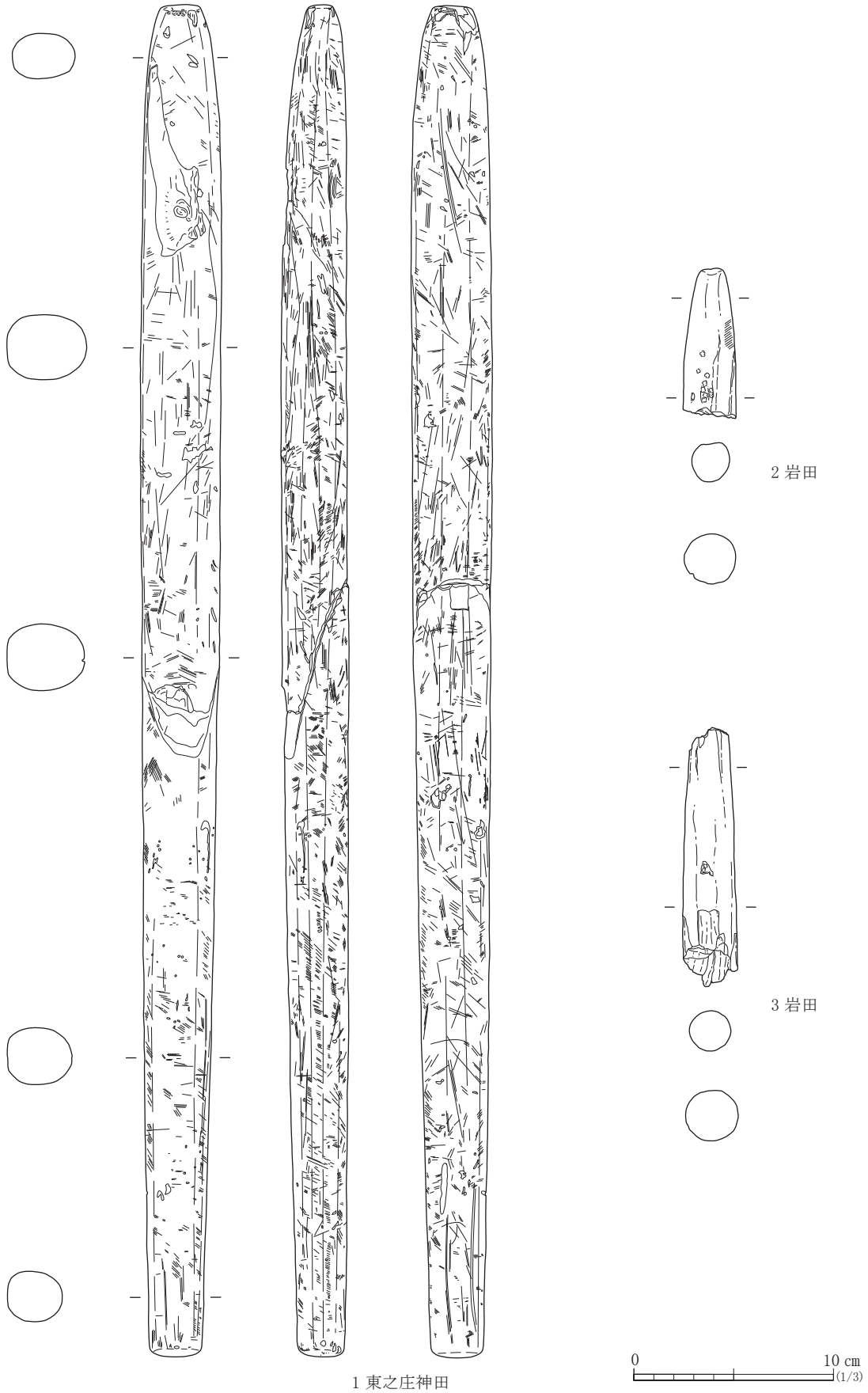


図 118 山口県内出土縄文時代石棒実測図①



写真 269 東之庄神田遺跡出土石棒

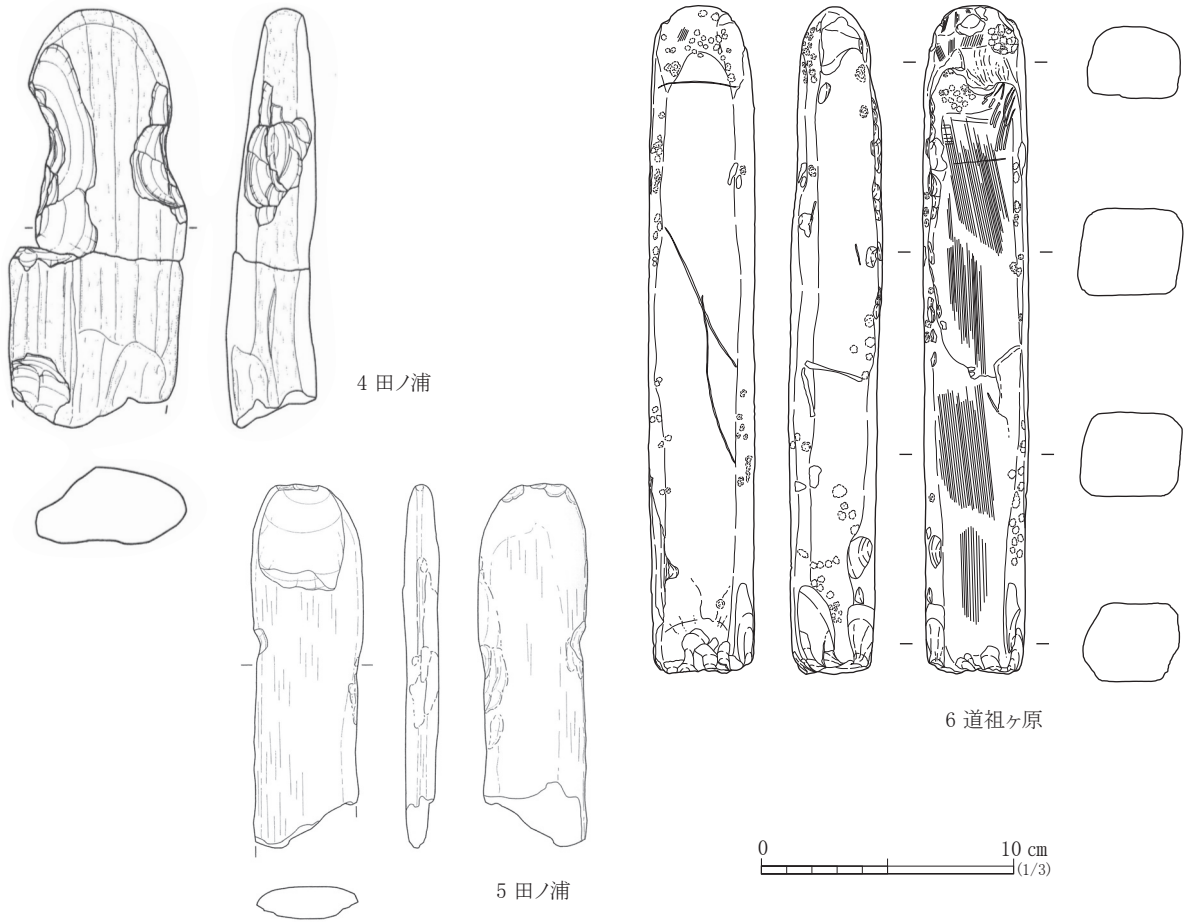


図 119 山口県内出土縄文時代石棒実測図②

4：石井ほか・2007 第 67 図より 5：谷口ほか・2011 第 190 図より

表 25 山口県内出土縄文時代石棒

番号	遺跡名	所在地	サイズ(cm/g)※	石材	備考	文献
1	東之庄神田	光市	全長 67.7 最大幅 4.1 最大厚 3.4 重量 1,595	頁岩か		小野1953、田畑2000、深田2014、福本1966
2	岩田	熊毛郡平生町	全長 (7.5) 最大径 2.1 重量 80.1	結晶片岩	断面円形	松崎寿和ほか1969、深田2014
3	岩田	熊毛郡平生町	全長 (13.0) 最大径 2.7 重量 136.9	緑色片岩	断面円形	松崎寿和ほか1969、深田2014
4	田ノ浦	熊毛郡上関町	全長 (16.6) 最大幅 6.9 最大厚 3.2	泥質片岩	抉り	石井ほか2007、深田2014
5	田ノ浦	熊毛郡上関町	全長 (14.38) 最大幅 4.46 最大厚 1.45 重量 143.9	緑泥片岩	抉り	谷口ほか2011、深田2014
6	道祖ヶ原	萩市	全長 26.4 最大幅 4.18 最大厚 3.42 重量 802	頁岩か	断面方形 東台遺跡から遺跡名変更	松村1985

(※括弧内は残存値)

料は把頭部や把部を有さないことから、後藤分類の中では東正院型石棒(A₁I類)に形態上最も近いと考えられる(田畑2000)。平坦面を一面有していることから、緩やかながらも刃部を持つととらえるとII Aaに相当すると考えられる。一方の端部がやや尖ることを考え合わせると、広義の石刀に分類することもあり得るだろう。^{註4}

本資料のような大型の石棒(刀剣型石製品)は中国地方ではほとんど知られていない。まずは近年の調査でわずかながら資料が増加している山口県内の事例をみておこう。図118-2・3は岩田遺跡出土資料である。2は断面がほぼ円形を呈し、先端部が細くなり丸みをもった状態となる。部分的に研磨痕・敲打痕が認められる。3も同様に断面はほぼ円形を呈し、先端部を欠損するものの2と同様に先端部に向かって細くなる。図119-4・5は田ノ浦遺跡出土資料であり、どちらも欠損している。4の石材は泥質片岩で、全体が荒く研磨されている。やや扁平な断面形態を呈し、明瞭な刃部は作りだされていない。端部は両側からの敲打により抉られており、頭部のような形状を呈している。5は緑色片岩製で、断面形態は薄く扁平となり、石剣状を呈する。端部に敲打痕があり、一部剥離する。4と同様に両側より敲打による抉りが作出される。頭部または把部として認識されていたのであろう。図119-6は旧むつみ村に所在する道祖ヶ原遺跡より出土したとされる資料である(松村1985)。節理に沿って剥離した素材を利用したと考えられ、断面はほぼ方形を呈している。先端部は敲打および研磨によって丸みをもたせてある。全体的に、直線的に仕上げるためと考えられる敲打痕が目立つが、研磨痕が顕著に認められる面も有する。基部は敲打により2次調整がなされている。本来は現状よりも長かったものが折損した際に、再加工された可能性もあろう。

4. 山口県周辺地域の石棒

本資料は、上述のように後藤分類の東正院型石棒との類似性を見いだすことができる(田畑2000)。たしかに形態上東正院型石棒に分類することが妥当であると考えられるが、西日本において東正院型石棒の分布密度が低いことに加え、比較的単純な形態であることから伝播によらない製作の可能性についても検討が必要と考えられる。東正院型石棒は関東地方から近畿地方にかけて主に分布し、太平洋沿岸、中部地方、日本海沿岸まで広く出土している(後藤1986第4図)。時期は、関東～中部地方においては縄文時代後期前葉～中葉にかけてが中心となり、近畿地方などの周辺地域ではやや新しい時期まで存続すると考えられている(前掲:53)。ただし、近畿以西における東正院型石棒の出土例は極めて少ない状況にあり、本資料を除く山口県内出土例は報告されていない。岩田遺跡出土の2点の石棒は、小片ではあるものの、やや尖り気味の先端部を有し断面形がほぼ円形を呈することから、把頭部に文様がないとすれば東正院型石棒である可能性を残す。ただ、最大幅・厚さは東之庄神田遺跡例よりもかなり細い。本資料が東正院型石棒の影響を受けて製作されたのであれば、山口県の地理を考慮すると後期の中でも中葉または後半に属する可能性があるだろう。この時期は、隣接する横樋遺跡の時期と符合するので、後期中葉を中心とした時期に用いられた蓋然性は高いと考えられる。

山口県に隣接する地域において、東正院型石棒の特徴となる、把頭部または把頭部の文様が確認できない石棒の分布をみておこう(図120)。ここでは便宜的に径約8cm以上の太形のものは除外し、一般的に細形と認識しうる資料に焦点をあてる。広島県内では、宮脇(1点)、御領(1点)、亀山(1点)、松江(1点)、大川浦遺跡(1点)より出土している。ただ、亀山例・松江例を除くとこれらのほとんどは三谷型石棒と考えられ、東之庄神田例とは時期が異なるものと考えられる。同じく瀬戸内海に面する岡山県では、川入・中撫川(1点)、津島岡大(1点)、彦崎(1点)、久田原遺跡(2点)より出土例がある。



図120 中四国地方・九州北東部における類似資料分布図(小林2000・2001、深田2014を参考に作成)

● 石製祭祀具出土遺跡 ★ 類似石棒資料出土遺跡

一方、山陰の鳥取県では、栗谷(1点)、島(1点)、妻木法男大神(1点)、上淀(1点)、長砂第4(1点)、陰田第7(1点)、本高弓ノ木遺跡(1点)より文様の施されない石棒が出土している。島根県では、夫手(2)、家ノ後Ⅱ(3点)、北原本郷(1点)、六重(1点)、原田(15点、うち1点は太め)、寺宇根(1点)、五明田(1点)、森(3点)、中原(1点)、沖丈(1点)、石ヶ坪(1点)、大蔭(1点)、九郎原Ⅰ(2点)、平田(1点)、板屋Ⅲ遺跡(1点)より出土例がある。

福岡県においては、下吉田(3)、アミダ(1)、東入部(1)があり、東入部例が東之庄神田遺跡例に類似した形状を示す。大分県では、釘野千軒(1)、宮地前(1)、大石(2)、大分川河床(1)、近中(1)、安国寺集落遺跡(1)出土例が挙げられる。

これらと山口県内の事例を比較してみると、道祖ヶ原遺跡例は断面が方形を呈しており、敲打によって調整されていることから、栗谷例・本高弓ノ木例・長砂第4例、蔵小路例にみられるような山陰系の多角柱型石棒の範疇で理解することができるだろう。多角柱型石棒の時期は縄文時代晩期後葉～弥生時代前期とされているため(中村2014・濱田2000)、東之庄神田例とは時期や系統が異なると考えられる。

次に、田ノ浦遺跡例の2点はどちらも石剣のような扁平な断面形を呈し、頭部に抉りを有することから、東之庄神田遺跡例とは様相が異なっている。岩田遺跡出土例はどちらも断面円形状の石棒であることから、これらも東之庄神田遺跡例とは異なるタイプであると考えられる。本資料は典型的な形態分類に当てはまるものではないが、非常に丁寧な調整がされているため、意図的にカマボコ形の断面形態が作出されたと考えるのが妥当であろう。

表26 九州出土桜ヶ丘型石器(小林編2001を参考に作成)

番号	遺跡名	所在地	時期	サイズ (cm) 重量 (g) ※	石材	特徴	文献
1	上唐原了清	福岡県 築上郡上毛町	晩期前半	全長 (33.8) 最大幅7.7 最大厚5.7 重量 (143.9)	凝灰岩	両端欠損 かつをぶし形?	岡本1998 吉村2000 菅波2001
2	広田	福岡県糸島市	後期末	全長 (12.3) 最大幅8.2 最大厚4.7 重量 (311)	凝灰岩質砂 岩	端部に1~3条の 線刻 かつをぶし形?	小池・粉川 1980 岡本1998 菅波2001
3	大原D	福岡県福岡市	後期末~ 晩期前半	全長 (10) 最大幅(4.3) 最大厚(2.2) 重量 (108.4)	凝灰岩質砂 岩	端部破片 3条の線刻	加藤1996 岡本1998 菅波2001
4	釘野千軒	大分県玖珠郡 九重町	—	全長 57.8 最大幅5.8 最大厚4.6	結晶片岩	平坦面を有する 表面採集	坪根・遠部 2001
5	小原下	長崎県島原市	西平~黒川式	全長 (12.4) 最大幅5.6 最大厚7.2	泥板岩		古田1967 遠部2001
6	小原下	長崎県島原市	西平~黒川式	全長 (33.7) 最大幅4.7 最大厚6.1 重量 (1510)	緑色片岩		古田1967 遠部2001
7	桜ヶ丘・ 馬糞塚	熊本県菊池市	—	全長 45.5 最大幅6.2 最大厚4.5	砂岩質	端部に隆帯・線 刻あり	富田1983 東2001
8	立田山周辺	熊本県熊本市	—	全長 (12.2) 最大幅(6.4) 最大厚(5.3) 重量 (276)	溶結凝灰岩	表面採集	東2001
9	上南部	熊本県熊本市	—	全長 (12.2) 最大幅(6.4) 最大厚(5.3) 重量 (276)	砂岩	端部が沈線で区 画される	岡本1998 東2001
10	桑鶴	熊本市貢町字 出口		全長 約45		完形品 図なし	古藤2000 東2001
11	セベット	宮崎県 西臼杵郡 高千穂町	晩期	全長 (13) 最大幅(8.6) 最大厚(8.2)	細粒砂岩	敲打により整形	岡本1998 高千穂土地開 発公社ほか 1984 東2001
12	中岳洞穴	鹿児島県 曾於市	後期後半	全長 (11) 最大幅(6) 最大厚(4.3) 重量 (447)	—		岡本1998 東2001
13	上加世田	鹿児島県 南さつま市	後期後半 (上加世田 式・入佐式)	—	—	表面採集 図なし	東2001

(※括弧内は残存値)

5. 九州の石棒—桜ヶ丘型石器を中心に—

山口県内では、本資料のほか5点の石棒が知られているが、いずれも形態、断面形態、石材の面で本資料とは異なっており、さらに中国地方の資料にも酷似する資料は見当たらないようである。製作数自体

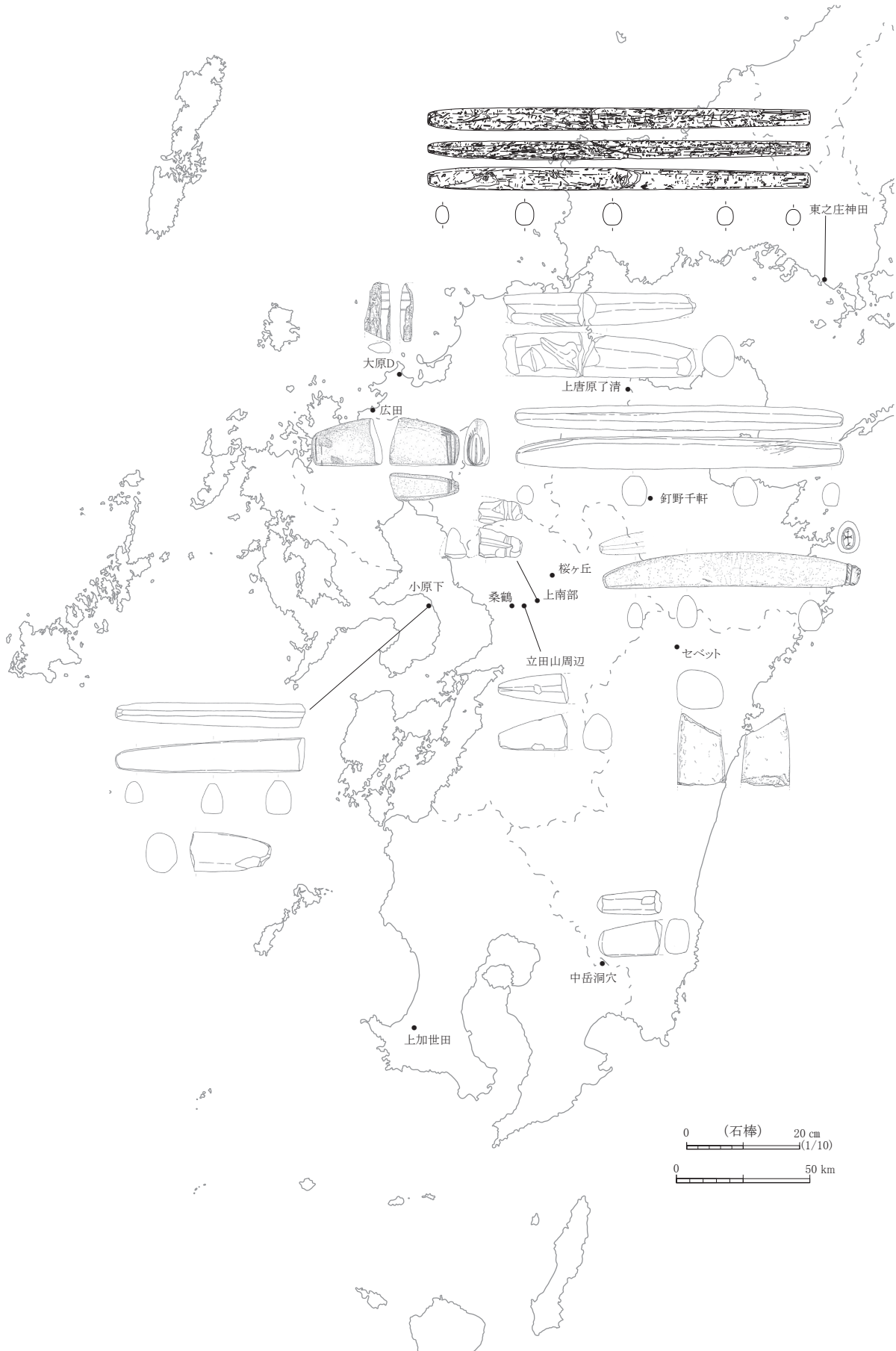


図 121 桜ヶ丘型石器分布図 (小林編 2001 より作成)

が少ないことによって定型的な石棒型式の発展につながらなかったとも推察されるが、本資料の調整が丁寧に行われていることは、製作の際に一定のイメージが存在していたと考えられる。上述の中国地方出土の石棒には、東入部例・釘野千軒例のような類例が散見される。このうち、釘野千軒例は桜ヶ丘型石器(岡本1998・1999、坪根・遠部2001)として分類されている。桜ヶ丘型石器の出土点数は少ないものの、本資料との類似について検討しておくことは重要だと考えられる。

桜ヶ丘型石器は平坦面をもち、三角形または楕円形の一端を切り取ったような断面形が特徴で、溶結凝灰岩や砂岩などの加工の容易な石材で製作され、晩期前半の所産とされている(岡本1998:6)。九州南部では、断面形が隅丸方形に近い形状になる例もある。無文の資料が多いようであるが、端部に沈線などで区画を施す例もある。図121は小林青樹らによる集成をもとにした桜ヶ丘型石器の分布図である(小林編2001)。これによれば、各遺跡からの出土数は1～2点ではあるが、九州全域に分布することがわかる。ただ、広田例のように幅広い資料は、かつをぶし形石器(吉朝2010)または御物石器(小池・粉川1980)に分類されることもあることから、確実に桜ヶ丘型石器と断定することは難しい。むしろ、文様が施されることが少なく、御物石器またはかつをぶし形石器のように幅広くはなく、断面形態が石刀・石剣と異なるカマボコ形のを桜ヶ丘型石器と分類できるだろう。桜ヶ丘型石器は集中した分布域をもたないものの、九州全域に広く分布していることは注目される。

東之庄神田出土資料は、桜ヶ丘型石器と比較すると細身の部類に入る。しかし、中央部から両端部にかけて細くなる形状は基準資料である桜ヶ丘例や釘野千軒例と共通している。桜ヶ丘型石器の石材は凝灰岩や砂岩が多いようであるが、片岩系の石材も用いられているので、地域的に分布する石材を用いていると考えられる。熊本平野の資料には端部に区画をもつものがあり、宮崎県・鹿児島県域の資料が隅丸方形の断面を呈するという特徴をもつとするならば、九州北半の桜ヶ丘型石器は無文でやや長いという特徴を見いだせる。この点で、東之庄神田出土例は、桜ヶ丘型石器との共通性をもつと判断される。そのため、分布域および形態的な特徴から考えると、東之庄神田例も桜ヶ丘型石器に含まれる可能性は排除できないだろう。そうだとすれば、資料数が少ないものの、分布域を考慮すると、国東半島や九州北東部のような隣接地域との交渉により影響を受けて製作された石棒である可能性が残る。桜ヶ丘型石器はそのほとんどが後期後葉から晩期にかけて製作されたと考えられており、東之庄神田遺跡周辺の状況と照らしあわせても时期的な問題はないと考えられる。一方で、東正院型石棒の分布をみると、東之庄神田例が単純に東日本からの影響を受けて製作されたものとは考えにくい。また、本資料の出土位置は東正院型石棒の西端にあたると思われるが、東日本からの直接的搬入という問題については、断面に平坦部分を有することから可能性は低いものと考えられる。製作時期は、東正院型石棒の終焉から桜ヶ丘型石器の出現という過渡期に当たる可能性がある。本資料の石材は頁岩と考えられるが、近畿から中・四国地方にかけては片岩系・安山岩の石材が多用され、九州の桜ヶ丘型石器では凝灰岩も加わる。石材はおおまかには地域性を示しており、在地の石材を用いて製作されたと考えられよう。

6. 本資料の位置づけ

2000・2001年の石製呪術具の集成以降(小林編2000;2001)、発掘調査にともなって中四国地方での縄文時代石棒は増加しているものの、大幅な変化を示すほどではない。今後資料増加は続くと思われるが、現時点での本資料の位置づけについてまとめることとする。本資料は完形の石棒として資料的に貴重なものであるが、表採資料であり寄贈品ということで、出土地点・伴出資料・出土状況などの詳細な情報は得られていない。しかしながら、縄文時代後期以降に石棒の分割や分配が想定される中で(稲田

2008)、完形の石棒が出土していることは用途や機能に地域差・時期差があったものと考えられ、瀬戸内海側でも資料や出土状況の検討が必要であろう。

本資料は、採集地点の近隣に分布する既知の遺跡の中では、横樋遺跡との関連が最も高いと考えられる。製作された時期は縄文時代後期～晩期中葉と考えられ、横樋遺跡にて保有されたものであれば後期の可能性が高くなる。中国・四国地方での類似資料が少ないため現段階での詳しい検討は難しいものの、今回の報告では九州の石棒との比較もおこない、類似資料の抽出を試みた。本資料は、東日本から九州への石棒類の伝播の過程を示す側面と、九州地方で独自に発展した石棒文化の影響を受けた遺物という側面の両者を備えた資料である可能性が考えられる。

【謝辞】

平生町歴史民俗資料館・平生町立平生図書館の皆様には岩田遺跡出土石棒の資料実見・実測をさせていただき、また本報告への掲載許可もいただいた。萩市教育委員会の柏本秋生氏、吉松泰宏氏、梅地崇氏には、道祖ヶ原遺跡出土石棒の資料実見・実測に際して大変お世話になった。深く感謝申し上げます。

以下の諸氏からは有益なご教示を賜った。末筆ではありますが、記して深謝いたします。小南裕一、田畑直彦、中村豊、乗安和二三、横山成己(50音順、敬称略)。永眠された乗安和二三氏のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

【註】

- 1) 『島田川』(小野1953)第56図6、図版第33図20、『山陰地方の縄文社会』(深田2014)祭祀遺物実測図51-11、など。
- 2) 山口県内では明確な刃部を有する石剣・石刀は出土していないものの、周辺地域からはそれらの出土が認められる。今回の報告資料は明確に石刀とみなし難いため厳密な区分はせず、石剣・石刀を含めた小型石棒類を主にあつかい、それらの総称として石棒と記述する。
- 3) A、刃部(あるいは側縁を走る稜)が一側縁を走るもの、a、稜と反対の側縁が曲線で結ばれるもの(後藤1986:35-36)。A₁ II Aaは九州に分布する天附型石刀として示されるが、これは大きく内湾しているため、本資料とは異なった形状を呈する。
- 4) 本資料の断面形態は御物石器に類似するが、本資料は中央部の幅と厚みという形態面から判断して御物石器には相当しないと考えられる。

【引用参考文献】

- 石井龍彦・安村隆博・児玉 勉(2007)『田ノ浦遺跡』山口県埋蔵文化財センター調査報告第59集, 山口県埋蔵文化財センター(編), 山口
- 稲田陽介(2008)「山陰地方における石棒の基礎的研究」, 島根考古学会(編)『島根考古学会誌』第25集, 松江
- 小野忠熙(1953)『島田川 周防島田川流域の遺跡調査研究報告 1950-1953』, 山口大学島田川遺跡学術調査団(編), 山口
- 岡本孝之(1998)「桜ヶ丘型石器について」, 九州考古学会(編)『九州考古学』第73号, 福岡
- 岡本孝之(1999)「遺物研究 石冠・石鋸・鏢節形石器」, 縄文時代文化研究会(編)『縄文時代』第10号, 所沢
- 遠部 慎(2001)「九州地域(長崎県・佐賀県)の概要と集成」, 小林青樹(編)『縄文・弥生移行期の石製呪術具2』考古学資料集 17, 栃木
- 加藤良彦1996「3次調査」, 福岡市教育委員会(編)『大原D遺跡群1』福岡市埋蔵文化財調査報告 第481集, 福岡
- 河村吉行(2001)「横樋遺跡」, 山口県(編)『山口県史』資料編 考古1, 山口

- 小池史哲・粉川昭平(1980)「広田遺跡0区」, 福岡県教育委員会(編)『二丈・浜玉道路関係埋蔵文化財調査報告』, 福岡
- 古藤忠志(2000)「桑鶴遺跡群 第1次調査区」, 熊本市教育委員会(編)『熊本市埋蔵文化財調査年報』第3号, 熊本
- 小林青樹(2000)『縄文・弥生移行期の石製呪術具1』考古学資料集12, 小林青樹(編), 佐倉
- 小林青樹(2001)『縄文・弥生移行期の石製呪術具2』考古学資料集17, 小林青樹(編), 栃木
- 後藤信祐(1986)「縄文時代後晩期の刀剣型石製品の研究(上)」, 考古学研究編集委員会(編)『考古学研究』第33巻第3号, 岡山
- 菅波正人(2001)「九州地域(福岡県)の概要と集成」, 小林青樹(編)『縄文・弥生移行期の石製呪術具2』考古学資料集17, 栃木
- 高千穂土地開発公社・高千穂町教育委員会(1984)『セバット遺跡』高千穂町文化財調査報告書第3集, 高千穂土地開発公社・高千穂町教育委員会(編), 高千穂
- 谷口哲一・後藤義拓・米田浩晃・山本寛子・中原香織(2011)『田ノ浦遺跡Ⅱ』第74集, 山口県埋蔵文化財センター(編), 山口
- 田畑直彦(2000)「中国地域(山口県)の概要」, 小林青樹(編)『縄文・弥生移行期の石製呪術具1』考古学資料集12, 佐倉
- 坪根伸也・遠部 慎(2001)「九州地域(大分県)の概要と集成」, 小林青樹(編)『縄文・弥生移行期の石製呪術具2』考古学資料集17, 栃木
- 中村 豊(2014)「中四国地域における縄文時代精神文化について—大型石棒・刀剣型石製品を中心に—」, 柳浦俊一(編)『山陰地方の縄文社会』, 松江
- 濱田竜彦(2000)「中国地域(鳥取県・島根県)の概要」, 小林青樹(編)『縄文・弥生移行期の石製呪術具1』考古学資料集12, 佐倉
- 東 和幸(2001)「九州地域(熊本県・宮崎県・鹿児島県)の概要と集成」, 小林青樹(編)『縄文・弥生移行期の石製呪術具2』考古学資料集17, 栃木
- 深田 浩(2014)「中国地方の縄文時代祭祀遺物集成」, 柳浦俊一(編)『山陰地方の縄文社会』, 松江
- 福本幸夫(1966)『先原史時代の光市』, 福本幸夫(編), 光(山口)
- 古田正隆(1967)『小原下遺跡報告(第1次発掘調査)—長崎県南高来郡有明町大三東に所在する—』, 長崎県立国見高等学校社会科研究クラブ(編), 国見(現雲仙市)
- 松崎寿和ほか(1969)『山口県岩田遺跡発掘調査概報』, 岩田遺跡発掘調査団(編), 平生(山口)
- 松村通男(1985)『むつみ村史』, むつみ村教育委員会(編), むつみ(現萩市)(山口)
- 山口県教育委員会(2002)『山口県文化財地図情報システム』, 山口県教育委員会(編), 山口
- 山田康弘(2008)「第3編第3章 縄文人の祈り」, 山口県(編)『山口県史』通史編 原始・古代, 山口
- 吉朝則富(2010)「かつをぶし形石器考」, 光記念館(編)『光記念館 研究紀要 自然科学』第6号, 高山
- 吉村靖徳(2000)『上唐原了清遺跡Ⅱ』一級河川山国川築堤関係埋蔵文化財調査報告5, 福岡県教育委員会(編), 福岡